



しょうせきのうほうしょう

掌蹠膿疱症ってどんな病気？

筑波大学附属病院 水戸地域医療教育センター
総合病院 水戸協同病院

皮膚科部長 医師 田口 詩路麻

司会者：早速ですが、掌蹠膿疱症という病気、あまり聞いたことがありませんが…。

田口：そうですね。逆にご質問させていただきますが、皮膚科の病気といえば、どんなものが頭に浮かびますか？

司会者：そうですね…かぶれや、水虫、ニキビなどでしょうか？

田口：はい。確かにそれらの病気と比較しますと、掌蹠膿疱症という病気にかかっている方は少ないかもしれません。日本では約1000人に1人ですので、約10万人以上の方がかかっているといわれています。平均年齢は55歳くらいです。

司会者：どのような症状が出ますか？

田口：人によってひどさや出る部位が異なりますが、典型的な症状としては、手のひらや足の裏に、膿（うみ）がたまった水ぶくれが、数多く見られます。周期的に良くなった悪くなったりを繰り返しますが、その後かさぶたとなって、皮膚からはがれ落ちます。

司会者：自覚症状はありますか？

田口：はい。全員ではないですが、皮膚の痒みや痛みを訴えられる方は多いです。指先や足の裏ですと、ものに触れる部分ですので、生活に支障が出る方も多くいらっしゃいます。10%以上の患者さんでは、関節痛を伴う場合もあります。

司会者：他人にうつったりする病気ですか？

田口：決してうつる病気ではありませんのでご安心ください。膿疱症という言葉の響きが悪いために、膿からばい菌が他人に感染してしまうと誤解されている場合がありますが、掌蹠膿疱症の膿疱にはばい菌がいません。無菌性膿疱といいます。つまり、インフルエンザやみずぼうそうのような感染症ではないので、皮膚に触れても、一緒にお風呂に入っても大丈夫です。日本では子供さんに遺伝しやすいといった傾向もありません。

司会者：すぐに治るものでしょうか？

田 口：残念ながら、慢性に経過します。人によっては10年以上と長い期間患っている方もいらっしゃいますが、平均3～7年で自然治癒したという報告もございます。いずれにしても、すぐの完治が難しくとも、ほとんど症状が無い状態に持っていくことができるようになっていきますので、根気よく付き合っていくことが大切です。

司会者：掌蹠膿疱症の原因は何ですか？

田 口：原因の2～3割は金属アレルギーや、口腔内や喉の慢性炎症だといわれていますので、積極的に検査を行い、原因を治療すれば、皮疹の軽快も期待はできます。ただ、残りの7～8割は検査をしても原因不明です。専門家の先生方が、色々な研究が進められていて、少しずつは分かってきていますが、残念ながらまだ全ては解明できていません。

司会者：お口の中や喉にも、原因がある場合があるとは、具体的には？

田 口：有名なところでは、虫歯が長年放置されているとか、慢性扁桃炎といって、よく扁桃腺が腫れてしまうなどの体質の方です。

司会者：となると、虫歯の治療や感染症の予防など、日常の習慣が大切になりますか？

田 口：おっしゃる通りです。虫歯の治療などの口腔内の健康は、食事をとるため、長生きするためには当然大切ですし、稀に虫歯の治療に使われていた金属が原因になっていることもあり、かかりつけの歯科の先生にもご協力いただきます。また、扁桃腺がいつも腫れやすい患者さんには、耳鼻科を受診していただき、扁桃摘出術という手術の相談をすることもあります。愛煙家の方は、喉のトラブルや上気道感染が多くなってしまい、皮疹を悪化させる原因になりますので、自分の患者さんには、少しずつ本数を減らせるように減煙や禁煙をお勧めしています。

司会者：掌蹠膿疱症は、皮膚の症状がメインですか？

田 口：全体の9割が皮疹のみの症状です。ただ、患者さんによって膿疱の数や、痛みなどの自覚症状も異なります。手足以外に、すねや体に発疹がでる方もいますが、かなり稀です。

司会者：残りの10%はどのような症状がありますか？

田 口：関節痛を伴う場合があります。特に掌蹠膿疱症の患者さんの場合は、胸骨と鎖骨の周囲に痛みを訴える患者さんが多く、頸部痛や腰痛の症状もありますので、当院でも整形外科の先生とも相談して治療しています。

司会者：掌蹠膿疱症の治療について教えてください。

田 口：乾癬の治療には大きく分けて、局所療法と全身療法があります。

司会者：局所治療について教えてください。

田 口：はい。全身療法が薬を飲んだり、注射をして薬剤を体内に入れたりする治療に対して、局所療法は皮膚の外から、とりわけ発疹のある部分を狙って部分的に治療する方法です。

司会者：具体的にはどのような治療になりますか？

田 口：最もよく知られていて、自宅でも簡便にできる方法が外用薬、いわゆる塗り薬による治療です。治療には主に2種類の薬剤が使われます。1つ目は、ステロイド外用薬です。炎症を鎮める薬で、特に赤みのある発疹や痒みの治療に効果的です。効果が比較的早く現れてくれる反面、長期に漫然と使用すると、皮膚が薄くなってしまう副作用を生じる場合もあります。

もう1つは、ビタミンD3外用薬といわれる薬で、皮膚が厚くなるのを抑えます。皮膚を正常な厚さに導いてくれて、特にガサガサした皮膚の盛り上がりの改善に効果的です。効果が現れるのは比較的ゆっくりです。

司会者：他に局所療法はありますか？

田 口：塗り薬だけでは良くならないときや、発疹の面積が広がったときは光線療法が用いられます。光源ランプを用いて、紫外線を照射します。近年、治療効果が高い波長のみを使うナローバンドUVB療法という治療が普及してきていますが、頻回な通院が必要になる場合があるので、主治医と相談して選択してください。

司会者：続いて、掌蹠膿疱症の全身療法について教えてください。

田 口：全身治療には大きく分けて、飲み薬と注射薬があります。いずれの治療も発疹の範囲が広がって、局所療法が困難な場合や、著しく生活の質QOLが悪化した場合に検討すべきと考えます。

司会者：近年、効果が優れた注射の薬も出てきているとお聞きしました。

田 口：はい。生物学的製剤、バイオといわれる薬です。今までの研究で、サイトカインと呼ばれる細胞間の情報伝達物質が過剰に作られているため、病気が引き起こされていると分かっています。掌蹠膿疱症では複数のサイトカインが複雑に絡み合って関与しており、それらを抑えることが治療につながります。

司会者：効果が優れていれば、皆さん使用したいと考えられると思いますが。

田 口：効果は塗り薬などと比較しますと、切れ味もよく、発疹が数か月でかなり消えて

しまうといった経験をされる方もいらっしゃいます。しかし、副作用に注意しつつ慎重に使用する薬剤ですので、投与前の検査をしっかりと受けていただくことが大切ですし、症状が重い方、これまでの治療でなかなか満足が得られていない患者さんが対象になってくると思います。

司会者：生物学的製剤の注意点などありますか？

田 口：いくつかの副作用がありますが、最も注意することは免疫を抑えることで感染症にかかりやすくなることです。そのために、投与前に血液検査や画像検査などを行います。内科の医師と連携しつつ、治療を行っていく場合もございます。また、これら新しい薬はとても高額になりますので、通常高額療養費制度が適用されますので、治療費に関しても医療機関で相談してください。

司会者：全身療法はどこでも受けられますか？

田 口：本日、ご紹介した飲み薬の治療については、お近くの皮膚科クリニックなどでも受けられますが、バイオ製剤に関しては、現在、日本皮膚科学会が認定した承認施設でしか投与できません。もし、現在の治療に満足されず、新たな治療について話を聞いてみたいという場合は、主治医の先生にご相談いただき、専門施設へ紹介していただくことも可能です。

司会者：バイオ製剤で乾癬は完治しますか？

田 口：バイオ製剤でほとんど皮疹が無い状態になることは十分可能です。ただし、あくまでも対症療法ですので、よくなった後も、定期的に継続したり、他の治療を組み合わせたりして、良い状態を維持することが大切になります。

司会者：薬はずっと続けないといけませんか？

田 口：掌蹠膿疱症は良くなったり悪くなったりを繰り返す経過の長い病気なので、良い状態を保つために根気よく治療を続けることが大切です。個々人の状態、時期によって適切な治療法は変わるものですので、主治医の先生とよく相談して、薬は指示に従って使いましょう。

司会者：その他、日常生活の過ごし方に注意は必要ですか？

田 口：因果関係は必ずしもはっきりしていないのですが、糖尿病や甲状腺疾患を合併することがあります。喉の渇き、倦怠感、動悸息切れなど思い当たる症状がありましたら、主治医の先生にご相談し、検査を受けてください。

令和2年10月20日（火）、28（水）放送